

はじめに

日本語で「丁寧さ」を表すものは何かと問われて、最初に思い浮かぶのは、「敬語」ではないでしょうか。

たとえば、「佐藤さんは行く?」という言い方よりも、「佐藤さんは行きますか?」のように「ます」という敬語のあるほうが、丁寧だと感じられることは言うまでもありません。そして、「佐藤さまはいらっしゃいますか?」のように「さま」や「いらっしゃる」という敬語を加えれば、さらに丁寧さが増すといえるわけです。

このように、敬語によって丁寧さを加えたり、表現を丁寧にしたりすることは、日本語の大きな特色だといえるでしょう。敬語を学ぶことによって、相手に対する「^{うやま}敬い」、自分に関する「^{へりくだ}謙り」、表現における「改まり」といった意味での「丁寧さ」を表現することができるようになるでしょう。

しかし、さらに広い意味での「気遣い」や「思いやり」、「尊重」などといった観点で括られる「丁寧さ」を表す方法は、敬語によるものだけではありません。

たとえば、目の前の相手に何かを取つてほしいとき、「取つてくれ。」と言うよりも、「取つてもらえる？」などと言うほうが、相手に配慮した、丁寧な表現になります。この丁寧さは、「さま」や「いらっしゃる」、「申し上げる」や「まいる」などといった敬語によるものではなく、表現の工夫によって表されるものです。

この本では、このような、敬語ではなく表現の仕方によつて表される丁寧さ（以下、「敬語によらない丁寧さ」と呼びます）がどのようなものなのか、その基本的な考え方について述べることにします。そして、「敬語によらない丁寧さ」によつて、他者に配慮し、他者を尊重するはどういうことなのかを明らかにし、それを目指すためのコミュニケーションの具体的なあり方を考えていきたいと思います。

なお、そもそも「丁寧さ」を表す必要があるのは、基本的には、何をどう表現しても許されるような親しい関係ではなく、一般的な社会生活を送る上での人間関係における表現の場合です。そのため、「佐藤、それ取つて?」といった「タメ口」ではなく、「佐藤さん、それを取つてくれますか?」というような「です・ます」を用いた表現を足場にし、その上で必要になる「敬語によらない丁寧さ」について説明していくことにします。もちろん、「親しき中にも礼儀あり」といえるので、「敬語によらない丁寧さ」は、親しい関係であつても役立つものとなるでしょう。